

オピニオン

うみな

投書欄

海行かば

中島 洋

去る6月の天皇、皇后両陛下サイパン慰霊ご訪問の際、デイケアセンターで両陛下をお迎えしたサイパンのマナムコ（老人）たちが、「海行かば」を歌った。その翌日、両陛下とお話をした3人のチャモロ人のマナムコにインタビューした。

昼食を共にした人は「サイパンが明るくなった気がする」と感想を述べた。2人目の人は会った途端に「中島さん、ぼくたち、きのうは天皇陛下の前で＜海行かば＞を歌ったよ」といった。実に嬉しそうだった。3人目は女性であったが「私はそんなに長く生きることはないから、きのうは本当に良かった。皇后陛下はとても優しい人だった」と感無量の様子であった。

サイパンのチャモロ人社会は、現在でも親子の絆が強い。これらの感想は、子、孫、曾孫へ、その日のうちに伝わる。子や孫からは翌日のオフィスで友人・知人に伝わり、曾孫からは学校で友達に伝わる。サイパンでは長く語り伝えられる歴史的なご訪問であった。

ところで、私は終戦時は中学2年生だったから、あの昭和12年作曲の「海行かば」は数え切れないくらい何度も歌ったが、あの歌詞については子供の頃から腑に落ちない箇所があった。それは「大君の邊（へ）にこそ死なめ」で、ここは「天皇のお傍で死のう」の意味と説明されていた。その前の歌詞は、「海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍」だ。そうすると、自分が水漬く屍あるいは草生す屍となってしまう戦死の瞬間は、大君の傍にいた。逆にいえば、大君が兵士たちの戦死するすぐ傍（非常に危険なところ）におられたということになってしまう。大君の「邊（へ）」というのは何かの間違いで、ここは大君の「為（ため）」にでないという意味が繋がらないと思っていた。当時の少年は、折に触れて、自分が戦死する時のことをふと想像してみたりしたものだ。

この歌詞については、昭和16年に陸軍幼年学校に入学、その後、士官学校に進んで終戦を迎えた本会会員の大橋旦氏にも伺ってみたところ、「あの歌は昭和17年から盛んに歌われるようになった気がするが、幼年学校の国語の時間に、辺にこそ死なめは、天皇陛下のお傍で死のうとの意味と習った。しかし、陛下のお傍で死ねるのは限られた特権的な高級将校だけだから、一般の軍人には縁の薄い歌だと思った」とのお返事だった。

やはり、「邊（辺）にこそ死なめ」では兵士の歌としては意味が通らないのだ。

二種類の歌詞

「海行かば」の歌詞には二種類ある。歌詞の最後が「のどには死なじ」で終わっているのが、明治13（1880）年に海軍の儀制歌（儀式歌）として宮内省の伶人、東儀季芳が作曲したものと、明治28年発行の『大東軍歌』に収録されている古谷弘政（第4代陸軍軍楽隊長）作曲のもので、「顧みはせじ」で終わっているのが、昭和12年の信時潔作曲のもので、明治13年に保育唱歌として宮内省式部寮雅楽課で作曲されたものだ。

前者、つまり「のどには死なじ」で終わっているものの歌詞は、聖武天皇の天平21年4月の宣命から採られており、また、後者は『萬葉集』第4094番の伴家持の長歌の一部分である。

邊（辺）ではなく、幣である

8世紀中盤、749（天平・21）年、前年もその前年も旱魃で収穫が少なく、飢えに苦しむ者も多かった。2月には行基大僧正が亡くなり、暗い世情だったが、2月下旬、陸奥の国で金が産出されると朝廷に金が献上された。日本で金が産出されたのは初めてだったので、朝廷では大いに喜ばれ、畿内七道の主だった神社に奉幣して報告した。

『続日本紀』によれば、4月には、聖武天皇は東大寺を訪問され、仏への感謝を述べられ、それ



サイパン島のディケア・センターを訪問された天皇、皇后両陛下。 Photo: Courtesy of Enrique Dela Cruz

に引き継ぐ儀式で、石上朝臣乙麻呂が宣命を読み上げ、臣下への褒賞があった。

その宣命の中に、大伴家持の先祖に関する詔詞があって、(汝たちの先祖どもは)「海行波 美豆久屍 山行波 草牟須屍 王乃幣尔去曾 死米能杼尔波不死」(と言い伝えてきた者どもである)とある。つまり、〈海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の幣にこそ死なめ 長閑には死なじ〉である。

この宣命に感激し、大伴家持は『萬葉集』第 4094 番として収録されている「陸奥の國に金を出だす詔書を賀ぐ歌一首并せて短歌」を詠み、その長歌の中に先の詔詞の最後を「顧みはせじ」と変えて挿入している。ところが、『萬葉集』の流布本では、「幣にこそ死なめ」が「敝にこそ死なめ」になっている。そして、後代、この「敝」がさらに「邊(辺)」と置き換えられているのだ。

当時は、まだカタカナもひらがなも成立していないので、いわゆる万葉仮名として、多くの漢字が日本語の音に当てられていた。たとえば「幣尔去曾」は「幣にこそ」と訓む。問題なのは、この幣という漢字を「へい」と訓む場合と、「へ」という音に当てた場合があることだ。「へい」と訓めば、神や天子に対する礼物の意味であるし、単に「へ」

と訓んだ場合は、どのような意味の「へ」なのかということになる。

『萬葉集』のオリジナルは現存しないから、オリジナルでは、この「敝にこそ死なめ」の「敝」が本当にその字であったのかどうかは不明である。しかし、この大伴家持の歌のタイトルから判断しても、聖武天皇の詔詞が先に存在したのは明らかで、そうであれば、家持も「幣にこそ死なめ」と書いたものと考えてるのが自然であろう。

また、のちに「邊」と置き換えられることを意図して「敝」と書くわけがない。家持はほかの歌では、山邊(3911 番)、海邊(4044 番)などの場合は、「へ」と訓まれることを意図して「邊」を使っているからだ。

ここで、聖武天皇の宣命に戻って、「幣にこそ死なめ」を考えてみよう。大伴家持の先祖は来目(大来目、久米とも)と呼ばれる戦闘集団を率いて神武天皇の東征に参加し、「撃ちてしままむ」と第一線で活躍していた。そのような第一線の戦闘集団の将兵が、大君のお傍で死のうと思ったのでは、戦闘集団として機能しなくなる。彼らは「海での合戦ならば水漬く屍、山野の戦いならば草生す屍になろうとも、君恩に身命を捧げて死のう、平穩には死なない」という心意気のはずだ。戦死する

場所が、大君から何十キロも何百キロも離れていても関係がない。

さらに、「幣にこそ」の「こそ」という係助詞は、語や句に付いて、「今度こそ」とか「勝つことこそ」と強調する働きをするわけで、兵隊が「邊にこそ」と大君のお傍で死ぬことばかりを願うわけがない。

以上のことから、ごく普通に考えれば、まず聖武天皇の詔詞に「幣にこそ死なめ」があり、大伴家持が「陸奥の國に金を出だす詔書を賀ぐ歌一首并せて短歌」の中に引用したが、その「幣」が写本の段階で「敵」に変わった。明治以降、喇叭譜を含めると6曲の「海行かば」が作曲されたが、その歌詞では「幣」は全く忘れ去られ、「邊（辺）」になってしまったということになる。

本居宣長の呪縛

なぜ、そうなったのか。原因は本居宣長の『続紀歴朝詔詞解』（1800年成立）にある。この書で、宣長が、幣を邊（辺）と解釈したのである。宣長は次のように書いている。

く王乃幣は、天皇の方にて、^{ほとり}邊の意也、俗に御馬前といふが如し、さてこの語のすべての意は、天皇の御從に仕奉りて、もし海を行く時に事あらば、天皇の御為に命をすてて、海の中にも沈みてむ、山を行く時ならば即ち其山にて、命をすてむといふ也＞

本居宣長は江戸開府から130年近く経って生まれた人で、しかも商家の育ちだから、かなり平和ボケしていたのであろう。この解釈からは、第一線の兵士たちの死生観など少しも伝わらない。まるで温泉地にでも行幸される天皇を護衛している時のような話ではないか。「邊に」ではなく「幣」として身命を捧げるからこそ、その死が至高のものとなるのである。

しかし、この宣長の誤った解釈が、明治、大正、昭和を経て現在にまで、その間、日清、日露両戦役、第一次、第二次大戦を経ているにも拘わらず、生き続けてきたのは不思議なことである。

幣は「へい」でよい

さて、ここでもう一つクリアしなければならない問題がある。それは、『萬葉集』の個々の語は、基本的にはやまと言葉だから、大伴家持の「海行かば」に「幣にこそ死なめ」とあっても、その「幣」

の訓みは「ぬさ」とか「しで」であったという可能性である。

しかし、『萬葉集』にも、課役(3847番)、功(3858番)のように漢字訓みの語が使われているものもあるし、大伴家持自身も、4121番では「朝参」(ちようさん＝毎月朔日の朝、朝廷で行なわれる儀式に参加すること)という語を用いている。「幣」を「へい」と訓むのは少しも不自然ではない。

もちろん、『続日本紀』を精査した上で、聖武天皇の詔詞の中の「幣にこそ死なめ」は、「ぬさにこそ死なめ」と訓むべきであると証明する人がいれば、それは大いに尊重されるべきことである。

ただ、奈良時代の知識階級は、平成のわれわれが持っている英語に関する知識よりも、漢語や漢字についてより高度な知識を持っていたような気がする。そうでなければ、あれだけ闊達に万葉仮名を使いこなすことはできなかったと思うのである。

【参考文献】

澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第十八』第五版、中央公論社、昭和45年。

佐竹昭広／山田英雄／工藤力雄／大谷雅夫／山崎福之校注『萬葉集四』（新日本古典文学大系4）、岩波書店、2003年。

小島憲之／木下正俊／東野治之校注・訳『萬葉集四』（新編日本古典文学全集9）、小学館、1996年。

青木和夫／稲岡耕二／笹山晴生／白藤禮幸校注『続日本紀 三』岩波書店、1992年。

大野晋編『本居宣長全集 第七巻』初版四刷、筑摩書房、平成2年。

『復刻盤 海行かば集』同梱解説書、二〇〇五海行かば集製作委員会、2005年。